

DH サマースクールで獲得した新たな視点 ——歴史研究者としての私がデジタルと向き合うということ——

New perspectives gained at the DHOxSS: What it means
for me as a historian to face the digital realm

若林 芽依
WAKABAYASHI, Mei

Abstract

This paper reports on my experiences and learning following my attendance the Digital Humanities at Oxford Summer School 2023 (DHOxSS 2023) held in July. I selected the class ‘Introduction to Digital Humanities’ and engaged in interdisciplinary discussions with other participants, with ‘digital’ as the common ground.

In historiography, the issue of inequality among historical sources is a problem, mainly because only historical sources that have been previously digitised are further digitised. The choice of historical sources to be digitised is related to their degree of deterioration, funding sources, and national considerations. Historians who use digitised sources and publish the results created in the above context may be seen as complicit in the vicious circle of inequality created by digitisation. Before utilising digitised sources, we, as historians, must be cognizant of the digitization process, besides examining the nature of the historical sources.

My experience at this summer school has also changed my approach to my career. Initially, my focus was on becoming a faculty member, but now I have the option of pursuing a career as a museum curator. As a profession, it combines my expertise with educational activities and has the potential to make traditional activities more engaging through digital humanities. This learning has influenced not only my research methods but also my vision for the future.

1 はじめに

2023年7月3日から7日までの計五日間、私はDigital Humanities at Oxford Summer School 2023(DHOxSS)への参加のため、オックスフォード大学キープル・カレッジを訪問した。本レポートは、このサマースクールでの学びを報告するものである。

以下では最初に、私が選択したコースの概要と、中でも特に興味深かった授業について説明する。次に、サマースクールでの経験を今後の自分自身の研究やキャリアの視点から振り返る。ここでは、Digital Humanities(以下、DHと略記)と人文学、歴史研究者として

の私の間で生じるであろう、相互作用にも言及したい。

2 DH 入門コースの概要と授業紹介

2.1 1 日目：「非公式」な存在へ手を差し伸べる “CGDC”

全 9 コースのうち私は Introduction to Digital Humanities という名の、理論や実践など、DH について幅広く扱うコースに参加した。入門編にあたるため講義中心であったが、DH 関連のツールやソフトウェアを使用した演習も実施された。いくつかの授業を紹介したい。

一日目は全コース共通して基調講演から始まり、二時限目以降から各コースに分かれて授業が開始された。基調講演では、グラスゴー大学の Lorna Hughes が、CGDC (Community Generated Digital Content) の取り組みについて説明した。前提として、近年の大規模な史資料のデジタル化は、「公式な」遺産や歴史を生み出すと同時に、コミュニティレベルの小さな史資料を公式の外へと追いやったという。デジタル化する史資料の選定は、資料保存の観点からその劣化の程度に基づいて判断される⁽¹⁾ほか、利用頻度が多いと予想されるものほど優先される。加えて資金提供源や、ナショナル・アイデンティティを考慮した国の影響を受ける⁽²⁾場合もある。このような背景から少数派となる小さな史資料のデジタル化は見逃され、非公式な存在となっているのである。

これに対する動きが CGDC であり、小さなコミュニティで生成されたデジタルコンテンツを意味する。コミュニティ主導で史資料のデジタル化が行われるため、平等であることを目指したデジタル化といえる。だが正式な機関を除いた、個人やグループ所有の小規模なコレクションであるが故に、メタデータ(データに関するデータ)が不足しており、かつ、デジタル化した史資料へのアクセスがローカルに限られている点が課題となっている。課題解決のため、グラスゴー大学は専門知識を有する 13 の機関⁽³⁾と連携し、情報の正確性やプライバシー、権利に留意しつつ、CGDC の生成及びそれらの空間・時間を越えたナショナル・コレクション化を推進している。

デジタル化資料の選定方法と選定結果が人々の認識に与える影響については、基調講演に限らず多くの授業で触れられている印象があった。利用者の多い史資料のデジタル化が進められる中で、それら多数派の史資料やそれに関連した事象の「公式な」歴史化に拍車をかける主体の大部分は、市民以上に、デジタル化資料を利用しそこから得られた成果を発信する研究者だと考えられる。これについては後に詳述するが、研究者はデジタル化された史資料を利用する際に、史資料自体が作成された時代の背景だけでなく、デジタル化に至った経緯にも注意して研究を行う必要があるだろう⁽⁴⁾。

二時限目では、DH の大枠を把握した。デジタル技術を人文学研究に応用する DH には、文学や言語学、歴史学、考古学、哲学、音楽学、博物館学などの多様な学問領域が含まれており、他の参加者との交流を通じて DH が扱う範囲の広さを実感した。DH の課題としては、デ

デジタルデータを保存するためのストレージや、前述のようなデータへのアクセスのしやすさ、倫理や著作権の問題、そして技術継承の問題が挙げられていた。

2.2 2日目：活用されるデータベースにするための工夫

二日目は、二時限目のリレーショナルデータベースに関する授業が興味深かった。必要なデータを瞬時に引き出し、評価、比較、分析に用いるためにはデータの構造化が必須であることを確認した上で、構造化したデータ同士を紐づけたい際は、リレーショナルデータベースが有効であることを学んだ。

データを構造化するにあたり、一人の人物を指すにもかかわらず名前の表記が複数存在する場合や、反対に同名異人である場合がある。その際には、生没年といった新たなデータを追加して判別可能にする必要があるが、データを増加、細分化し過ぎてもデータベース利用者の混乱を招く恐れがあると知った。また人文学データベース特有の課題として、断片的で不完全なデータの在り方や、各データ解釈の確実性の程度の違い、経年による用語の変化などがある。これらについてもデータの細分化が対応策として考えられるが、同時にデータベースを複雑化させてしまうだろう。データベース利用者の意見を取り入れながらの定期的な改善が大切だと思われる。

2.3 3日目：私たちの記憶を左右するアーカイブと支配者

三日目については、一、二、四時限目の授業を紹介したい。一時限目では、アーカイブにまつわる問いを考えた。とりわけ、アーカイブと支配者の関係に関するものが印象深かった。人々が多くの部分で共通点を有しているものが国家であり、何かを忘却する際もみな同じなのだという。そして現代の記憶は、即時の記録や画像の可視性からアーカイブに依存しているという。アーカイブの作成は、史資料の収集、組織化、目録作成、検索および修正、(公開、)利用の過程を踏む。ここで、アーカイブ作成時に収集する史資料の選定が、人々の記憶に影響を及ぼす構図が確認できる。これは前述の基調講演におけるデジタル化資料の選定が置かれた状況と類似しているといえよう。デジタル化されない、アーカイブに含まれないことで、実際には存在する史資料が発見及び利用される機会を奪い、そのような史資料は当初から存在していなかったかのような扱いを受けるのである。

史資料の選定には前述のような資金提供源や国といった権力が働く場合もある。しかし実際に選定作業を行うのは研究者が大半である。授業では、「私たちは何を覚え、何を忘れるべきなのか」が問われた。ここではその具体例を考える以上に、デジタル化やアーカイブ作成を行う際は、自らの行動が他者の記憶に与える影響を意識し、責任を持つ必要があると感じた。

二時限目では、人文学におけるクラウドソーシングが取り上げられた。デジタル技術が人間に与えた意義には、かつては少数の権力者が独占していた文化的財に一般の人々もアク

セスできるようになった点や、アナログ時代から続く作業を新たな手法で実施可能にした点がある。後者の例には、クラウドソーシングを活用した大規模でのオンライン百科事典の作成が挙げられた。人文学でのクラウドソーシングの作業は五つに大別されており、(1)テキストの転写、(2)メタデータの強化(タグ付け、書き換え、説明)、(3)カテゴリー化、分類、(4)OCR(光学文字認識:画像内テキストをデジタルデータに変換すること)の検証、(5)コンテンツの識別が行われている。市民科学を支援するポータルサイトとしてはZooniverseが紹介され、非専門家が主導する研究活動も増加していることを把握した。

四時限目は、オックスフォード大学自然史博物館の方とともにオンラインコレクションの強化について考える内容だった。同館ではCollections Onlineと呼ばれるプラットフォームが開設されているが、利用者数増加を図るためにはどのような取り組みが必要か、議論がなされた。同館関係者からは、デジタル化資料の数を増やす、他サイトと連携した統合サイトで同館のデータを利用できるようにする、ソーシャルメディアを使用して広報を行うなどの案が提示された。この点からは、データにアクセス可能な環境を構築しただけでは不十分であり、人々に利用されるための工夫が必須であることに気付いた。

2.4 4日目:各学問分野がDHとともに生み出す個性

四日目は、AI時代における古代楔形文字の研究(デジタルアッシリア学)を取り上げた、一時限目の授業に興味を惹かれた。アッシリア学では1970年代から史資料のデジタル化が進められており、写真、3Dデータ、線画といった画像に加え、機械学習を活用したOCRや翻訳及び意味解釈など、多方面からの分析がなされている。また将来的にはAIによるモチーフ分類の自動化(画像の注釈付け、アノテーション)も行うようである。楔形文字は粘土板や円筒印章といった立体物に刻まれている。立体物からテキストデータを得るための高度な画像処理技術が、現在の多角的な視点からの分析を実現させており、デジタルアッシリア学特有のDHの発展なのだと学んだ。

五日目の二時限目には、書簡のオンラインコレクションを作成しているElectronic Enlightenmentプロジェクトの方の指導のもと、デジタル版の歴史的書簡からデータを抽出した。リレーショナルデータベースの授業でも指摘された、時間場所の記述方法の違い、経年による変化はここでも課題となっており、データの標準化が進められていた。加えて、プロジェクト独自のデータの曖昧さ回避のプロセスとして、プロジェクト所有の書簡と個人を照合し、書簡での登場数から階層や知名度を割り出す方法が取られていることを理解した。

3 DHサマースクールでの経験が私に与えた視点

3.1 研究やキャリアについて

ここからは、今回のサマースクールの経験をどのように自分自身の研究やキャリアに活

かすのかについて示していきたい。繰り返し述べてきたが、史資料のデジタル化を始めとした DH の営みの背景には様々な思惑があり、活動が平等に実施されているとは言い難い節があるのだと気付かされた。デジタル化資料を歴史研究者が利用して成果を発信することで、元来注目されていた史資料に更に注目が集まり、不平等の再生産を生じさせている。そのため、アーカイブを利用する際には、アーカイブが「公式な」歴史を多く含むものであり、歴史的事象を網羅するものではない点を念頭に置く必要があるだろう。自分でデジタル化や分類、アーカイブの作成を行う際にも、無意識のうちにバイアスがかかってしまう点に注意したい。

キャリアについては、これまでは研究者の中でもとりわけ大学教員を志してきたが、他の選択肢も視野に入れるようになった。サマースクールには学生、大学教員のほかに、イギリス国立公文書館のアーキビストや博物館学芸員なども参加していた。全員が自分の専門領域を持っている点では共通していたものの、学校以外の職業を選択している者も一定数いたのである。以前から私は、自分の専門である西洋史と教育を組み合わせた職業に関心があり、その点から大学教員を志望してきた。実際に、専門性を高め、教育に活かす方法を体得するために、学部時代に学芸員や教員免許状を取得し、大学教員に必要だと思われる力も養ってきた。だが周知のように、学芸員も調査研究や教育普及活動を行う。加えて、オックスフォード大学自然史博物館のオンラインコレクションの事例からも分かるように、博物館活動に DH、ひいてはデジタル技術の知識は不可欠である。オンラインコレクションの作成及び公開は、劣化の危険から展示が困難な資料を、負荷をかけることなく公開することもできる。今後は、自分の専門と教育を掛け合わせた職業だけでなく、DH を用いることで、それまでの活動が深化し、より魅力的になる職業を考えていきたい。既に DH を取り入れている職業に限らず、新たな場での DH を活用した取り組みも行えるだろう。

3.2 DH と人文学と人

最後に、DH と従来の人文学、歴史研究者としての私における相互作用について言及する。まず、サマースクールを通じて DH とは、人と人とをつなぐ営みであるように感じた。一つ目のつながりは、研究者間の専門領域を超えた学際的なつながりである。DH を共通点としながらも、研究対象へのアプローチ方法は領域によって異なるため、参加者との意見交換の中で新たな視点を獲得するのである。そして二つ目は、研究者と市民、市民間でのつながりである。アーカイブやクラウドソーシングといったデジタル技術により、研究が市民にとって身近なものとなり、更には市民だけでも研究が行われるようになった。しかし、即座にデジタル技術を扱える時代であるために、歴史学における「公式な」歴史のような不平等とその再生産は生じやすいであろう。それ故、適切に対処するためにも DH の専門家は必要となる。

DH は、人文学を市民にとって身近なものに変革したうえ、CGDC のような「公式な」歴史

に対抗する活動をも可能にした。CGDC は現時点では草の根的な活動に留まる。だが、DH の発展とともに各地で類似した活動が展開された際には、歴史認識や歴史研究の在り方にも影響を与えるであろう。

4 おわりに

以上、サマースクールでの学びについて述べてきた。研究者本人による DH 研究紹介を通じて、DH に対する解像度を高め、自分の研究への応用を具体的に想像することができた。また、サマースクール参加者との交流は己の将来について見つめ直す機会となった。今回得られた知見を研究のみならず、普段の生活にも活かしていきたい。

注

- (1) Gerben Zaagsma, “Digital History and the Politics of Digitization”, *Digital Scholarship in the Humanities*, vol. 38, 2023, pp. 830–851. <https://doi.org/10.1093/llc/fqac050>
- (2) 小風尚樹《デジタル・ヒストリーの小部屋》連載第 17 回「コミュニティによって生成されたデジタルコンテンツ (CGDC) とデジタル・パブリック・ヒストリー：沖縄県南城市の取り組みをうけて」『人文情報学月報』143 号、2023 年。
- (3) The National Archives, University of Manchester, National Library of Scotland, National Library of Wales, Public Record Office of Northern Ireland, Tate, Association for Learning Technology, Digital Preservation Coalition, Software Sustainability Institute, Archives+, Dictionaries of the Scots Language, National Lottery Heritage Fund, Wikimedia UK のことである。
- (4) 既に、デジタル化史資料を批判的に考える (いわゆる、デジタル史料批判) プロジェクトとしてルクセンブルク大学 C2DH による Ranke.2 がある。“PROJECTS,” Ranke.2, <http://www.c2dh.uni.lu/projects/ranke2-teaching-platform-digital-source-criticism> (最終閲覧日：2024 年 3 月 6 日)

(わかばやし めい 千葉大学大学院人文公共学府博士前期課程)